

ニーチェ・コントゥラ・パスカル（その1）  
——パスカルの「理性の論理」と「心情の論理」——

Nietzsche contra Pascal (I)  
Die Logik der "raison" und die des "cœur" bei Pascal

圓 増 治 之  
Haruyuki Enzô

(I)

ニーチェはその著『この人を見よ』の中でパスカルについて次のように語っている。「私はパスカルを読むのではない、むしろ愛するのだ。つまり、最初は肉体的に、次いで心理的に、徐々に虐殺されていったキリスト教の最も教訓に富んだ犠牲として」<sup>(1)</sup>と。この一文から「パスカルの没落」(Pascals Untergang)の運命に対するニーチェの限りなき愛惜の情が窺われる。その語調は、人間についての「人間的な、余りにも人間的な」理解を超えた次元でのパスカルの人間理解が、ニーチェの極めて鋭敏な心情の琴線に触れて奏でられた調べではなかろうか。それでは一体如何なる次元での人間理解に於いて、「キリスト者」(Chrétien)たるパスカルと「反キリスト者」(Antichrist)たるニーチェとの間に心情のコミュニケーションがあったであろうか。

パスカルはすぐれた数学者、自然科学者として人生の第一歩を踏み出し、若年にして数多の卓抜せる業績を遺したが、その彼が方向転換して「人間の研究」に携わり、その研究を介してさらに、晩年には宗教的生活にまで赴いていったのであるが、この方向転換の事情について記した次のような一文が『パンセ』に遺る<sup>(2)</sup>。

「私は抽象的な科学の研究に久しく時を過ごしてきた。そしてこの研究によってもつことができるコミュニケーションが少ないことが、この研究に対する嫌けを私に抱かせた。私が人間の研究を始めた時、これらの抽象的な科学が人間にふさわしくないこと、また、私は抽象的な科学の研究に徹底したが故に、それに無知な他の人々よりも一層私の状態に関して迷っていることを知った」。

この文から推察される如く、パスカルの「人間の研究」の問題——それは人間は迷っているという人間の根本的コンディションに根差した問題であるが——が問題となったのは、パスカルの科学研究の徹底によって開かれた次元に於いてであったのではなかろうか。従ってパスカルにとっての問題は、最初から宗教的に思索して出会ったものでなければ、いわんや社会的な交際のうちで現われた問題でもないのである。さればこそ、パスカルのいうところによれば、「(パスカルの言う意味での)人間を研究する人は幾何学を研究する人よりも一層少ない」のである。

我々もまずこの問題次元を、この次元を開示したパスカルの科学の基礎についての探究の跡を追って、究明していこう。

(II)

パスカルの科学基礎論は、「論証の術」(l'art de démontrer)としての科学の方法論についての考察に基づいている。かかる意味での方法の理想たる「真の方法」とは、パスカルの断篇的小論文『幾何学的精神について』<sup>(3)</sup>によれば、「一つには、予めその意味を明確に説明されていない用語はすべて用いない。次に、すでに知られている真理によって証明されなかった命題は提唱しないこと」という二つの制約によって成り立つ。しかるに、かかる「真の方法」はあくまで方法の理想にとどまり、「真の方法」に従って「絶対的に完結した秩序」をもつ科学を実現することは、我々人間にとって不可能である。なんとなれば、我々がいくら「定義と証明」という方法に従って基礎に向って溯っても、最も基礎的な第一概念を定義しようとすれば、「それを説明するのに用いる先行的な用語を前提

する」ことになるし、同様にまた、「第一の命題を証明しようとすれば、それに先行する他の命題を前提する」ことになるからである。すなわち、科学が自分で——つまり「定義と証明」という方法で——自分自身を基礎づけようとした場合、必然的に推論的な理性の平面上を無限に背進するという事態に陥ってしまうのである。科学の基礎に含まれるいくつかの「原始語」(mots primitifs)は定義することはできないし、また「第一原理」(les premiers principes)も理性によって証明することはできない。しかし、そうだからといって、「原始語」や「第一原理」(あるいは公理)が不分明かということ、そうではない。むしろ「原始語」が意味している事柄は定義する必要がない程明白であるし、「第一原理」、「公理」は証明する必要がない程自明な事柄である。つまり「原始語」、「第一原理」は定義不可能・証明不可能というよりもむしろ定義不必要・証明不必要だと、パスカルは言うのである。そして「原始語」や「第一原理」の定義や証明の不必要性は、当該の事柄の「極端な明証性」(leur extrême évidence, p. 583)からくるのである。たとえば「空間、時間、運動、同等、多」といった「原始語」はそれが意味している事柄をきわめて「自然に指し示す」(désigner naturellement, p. 579)。同じことであるが、理解する我々の側から言えば、我々は「空間、時間、運動、同等、多」といった言葉を「自然に理解している」(entendre naturellement, p. 581)のである。

ここでパスカルのいうところの「自然に」とは、我々が「人為」(l'art)の手を加えるのに先立ってということを含意している。「自然(la nature)はそれ自身で無言で(sans paroles)、人為が我々の説明によって我々に得させるよりも明瞭な意味を教える」(p. 580)。自然はことばによって説明されない、むしろ言葉がそこに於いて初めて無言裡に理解される光を我々に最初から与えている。それが自然の光(la lumière naturelle)である。我々は、定義・証明といった方法すなわち人為的な術(l'art)に先立って、すでに自然に、暗黙裡に、原始語や第一原理が開示される地平に立っているのである。その第一次的な開示の地平の上に立ってはじめていわば二次的に定義を与えることが可能なのである。

我々は元々元初からすでに原始語の理解の地平のうちに被投的に存在している。パスカルの表現によれば、「われわれの魂は身体のうちへ投げこまれており、そこで数、時間、空間を見い出す(ou elle trouve nombre, temps, dimensions.)。魂はその上で推理し、それを自然、必然と呼び、他のものを信じることができない」(『パンセ』fr. 233)のである。単に数、時間、空間だけでなく、実は、元初的な地平の開示のうちで人間は自分自身を見い出して存在する(se trouver)。人間の存在には根源的に地平の開示が属しており、その地平のうちで人間は自分自身を見い出して存在するのである。人間が存在するとは常に地平のうちに存在するということであり、また地平のうちで自分を見い出して存在するということである。われわれ人間は抽象的に単にあるのではなく、常に一定の地平のうちで存在する。つまり或る一定の情態(condition)において存在するのである。従って、我々人間はまず一方に於いて魂として存在し、他方において身体として存在しており、次いで魂と身体とが合一するというような仕方では存在するのではない。我々の魂は最初から身体のうちへ投げこまれており、そこで自分自身を見い出している、つまり存在しているのである。上に引用したパスカルの発言の真意はかように解されて然るべきである。

以上のように最初から人間存在には元初的な地平が開示されている。逆に言えば人間は最初から地平のうちに存在している。日常的生活でもすでに原始語の理解が属している。尤原始語以外、日常的に使われている語は多義的で、その語が指し示すものは曖昧なままではあるのだが。

これに対して幾何学は原始語以外のすべての語を予め定義する。幾何学の研究領域は、人為的に定義を与えることによって開かれた地平である。幾何学の定義は名目的定義で明白に指示されるものに名称をつけるのである。逆に言葉の方からいえば、幾何学の定義は、他の意味を剥ぎとって、一義的に一つの事柄を言葉に指し示させるのである。幾何学の次元は、原始語・公理によって自然にすなわち第一次的に開かれた元初開示の地平の上にさらに我々が名目的な定義を与えるという技巧(l'art)によって二次的に開かれる。従って

幾何学は証明不可能・定義不可能な公理を仮説するが故に、「絶対的に完結した秩序」ではないが、それだけを仮設してその他の一切の語を定義し、一切の命題を証明するが故に「人間の世界で最も完全な秩序」(p. 579)なのである。

幾何学の地平は、原始語と予め定義された語だけによって開かれるが故に狭い。その代り、「証明にあたっては被定義語の代りに定義そのものを意識の上で置き替えさえすれば、結論のいかんともしがたい力は必ずその効果を発揮する」(p. 597)。つまり、幾何学の地平で証明される命題の確実性(certitude)は保証されるのである。幾何学は定義を自分から自分に対して与えることによって強く狭い地平を開いているのである。「意識の上で(mentalement)に被定義の代りに定義そのものを置き替えなければならぬ」ということは、逆に言えば、そこに於いて命題を確実に立てることができる地平を開くために、幾何学は意識の上で自分自身に対して予め定義を立てておいたのだということになる。

このように、幾何学は定義をみずからに与えることによって確実な推論の地平を開くと共に、その地平のうちに意識的に自ら閉じ込めるのである。してみれば、「幾何学」は常に地平の開示のうちにある人間の在り方の一つ、すなわち幾何学という地平のうちにある人間存在をも表わしている。かかる幾何学の地平を開くと共にそこに閉じこもった人間のあり方をバスケルは「幾何学的精神」(l'esprit de géométrie, 『パンセ』fr. 1)と名づけている。幾何学の地平は狭いがその地平に於いては推論は有無をいわさぬ仕方で展開されるが、それに対応してそういう地平にある幾何学的精神も「強く狭い」(『パンセ』fr. 2)のである。

幾何学は予め一義的に制限された意味をもつ用語を立てることによって、狭く限られた地平を開いている。それ故その地平に於いては対象は「粗い」(gros)原理のもとに我々の前に現象してくる(『パンセ』fr. 1参照)。すなわち幾何学はごく単純な図形のみを対象として考察する(p. 595)のである。幾何学のパースペクティブは元々微妙なものを無視し見過すことによって開かれているが故に、デリケートなものに対しては幾何学の見方は適していない。敢えて強引にデリケートなものを

幾何学の地平へ引き入れて見ようものなら、それはデリケートなものを歪めると共に、自らも歪んでしまうのである。幾何学は自らの地平に閉じ込める(se renfermer)ことによって確実な基礎(assiette ferme)に立つのである。

従ってバスケルにとって幾何学は名目的定義と公理とを立てることによって自分に対して確実な基礎を提供するが、その確実な基礎は幾何学だけにとつてにしかすぎない。デカルトが求めたように諸科学における「確実不易なる基礎」<sup>(4)</sup>にはなりえない。デカルトのマテシス・ウニヴェルサルリス(普遍数学)の樹立は、バスケルにとって最初からユートピアである。幾何学は、バスケルからみれば大まか(gros)な原理に基づくが故に、微妙なことを無視して「大まか」(en gros)になら話すことはできる。しかしすべての事柄を幾何学的に説明しようとするなら、幾何学の術(l'art)は幾何学の狭い地平にそれを歪めて閉じこめることになる。「自然はすべての真理を各々それ自身のうちに置いた、我々の技巧が一つのものを他のものうちに閉じこめた。しかしそのことは不自然である。おのおのの真理は自分の場所を占めている」(『パンセ』fr. 21)。

「幾何学者でしかない幾何学者」(『パンセ』fr. 1)は自分が開いた地平に自閉的に閉じこもっているが、これに対して「大幾何学者」(『パンセ』fr. 2)は幾何学の地平の基礎に向かってどこまでも溯源し、しかも単にそれだけにとどまらず、幾何学とは別の一層根源的な次元に突破するのである。元々人間の生にとって自然に(naturellement)広漠たる元初的地平が開かれているが、幾何学はその地平のうちへさらに明確に意味限定(定義)された語を投げ入れて地平を制限し、意識の上で(mentalement)に幾何学固有の一貫的秩序をもった地平(すなわちバスケルのいう「幾何学的秩序」)を開く。幾何学者でしかない幾何学者はその地平の上で帰結の方に向って無限に推理(raisonnement)を展開していくが、「大幾何学者」は帰結の方に向うだけでない。もはや理性(raison)によっては解明できない——すなわち幾何学の方法によって解明できない——幾何学の基礎を溯源究明する。然して究明する幾何学者自身が自らの狭く閉じられた幾何学的地平をその根底へと突破し、

元々人間的生に自然に開かれていた包括的な広い地平へと幾何学の基礎を究明する者自身が出るのである。

従ってパスカルの幾何学の方法論は単に文字通り幾何学の方法について述べただけではない。方法論を通して幾何学の基礎にして且つもはや幾何学の次元ではない別の次元へと、方法論を論じる者自身が突破するのである。この論文の冒頭で「パンセ」から引用した文のなかでパスカルは「私は抽象的な科学の研究に徹底したが故に (en y pénétrant), それに無知な他の人々よりも一層私の状態に関して迷っていることを、知った」といっているが、要するに、パスカルは幾何学の基礎の研究を通して、幾何学の狭い地平を突破して、より広い地平に出で立ったのである。かかる地平のうちで見出した自分自身(すなわち自分のコンディション)は広漠たる地平のなかで自分自身を見失い迷っている (s'égarer) というコンディションなのである。

前述の如く、幾何学の基礎は幾何学の方法(定義と推論的証明)によって究明できない。原始語を定義しようとしても無駄である。「いたずらに立ちどまってそれら(原始語)を定義することなく、それらの本性に透徹する (pénétrer la nature)」ことによってはじめて「それらの驚嘆すべき特質を発見する」(p. 583) ことができるのである。ところで、原始語が指示するのは、いわゆる「存在者 (Seiendes)」ではない。むしろ存在するものがそこに於いて存在するところの「地平的なもの」を指し示している。「時間、空間、運動、数」等は、すべての存在者がそこにおいて現象する包括的な地平を形成する。パスカルの用語によれば「全宇宙を包むもの (chose, qui comprennent tout l'univers)」(p. 583) である。原始語が「極端な明証さ」をもつのも実は、原始語が、すべての存在者がそこにおいて見い出される地平的なものを指し示しているからである。それでは一体地平的なものはどのような特性をもつのであろうか。

それは、地平的なものは大いさに向っても小ささに向っても無限に開かれているという特性である。たとえばどんなに大きな空間であっても、それ以上大きい空間を考えることができるし、また反対にどんなに小さい空間であってもさらに小さ

い空間を考えることができるのである。存在するものはすべて無限大と無限小(無)とに向って開かれた地平のうち有限なものとして存在するのである。我々人間も有限なるものとしてやはりまた無限大と無限小(無)の中間に存在する。

このように、パスカルが元初的開示の地平の特性の解明のために投げかけた光は、自分自身へと返照し、元初的開示の地平のうち存在する彼自身の存在を照らし出した。かくして『幾何学的精神について』の終末部分 (p. 591) では次のように言う。

「これらの真理を明確に認めるものは、四方からわれわれを取り囲んでいるこれらの二重の無限にあらわれた自然の偉大さと力とに驚嘆し、自分が広がり無限と無との中間に、数の無限と無との中間に、運動の無限と無との中間に、時間の無限と無との中間に置かれているのを見て、この驚くべき考察により自分自身を知ることを学びうるであらう」。

### (III)

以上パスカルの科学基礎論では、幾何学が自分自身の基礎を究明して行ったその究極において、幾何学的地平を脱却して、無限と無とに自分を曝す (s'exposer) ことになる。そして、その無限(無)はもはや「理解すべきものではなく、驚異すべきものである」(p. 590)。我々が驚異するのは理性 (raison) によってではなく、心情 (心臓 cœur) によってである。理性による自己究明の思索が、自己の根底に自分とは別の「心情」の次元を開示したのである。「理性の最後の歩みは、理性を超えるものが無限にあるということを認めることにある」(『パンセ』fr. 267)。パスカルにおいては、理性を超えたもの、不可解なものに対する理性の服従は、理性それ自身のうちから起こるのである。理性みずからが屈することによって、「自然の大きな驚異に対して心を開く」(p. 583) のである。

ところでさて、上のような科学基礎論を通さなくとも人間はもともと元初的開けのうちに出て、そこで生きている。元初的開けのうちで第一原理・自然原理を、理性によってではなく心臓によって感知 (sentir) し、自分自身を感知している。

心臓において我々は無限の開けのうちへ出て、無限の開けに身を曝しつつ、かかる自己を感知している。人間である限り、人間として存在する限り、無限の開けのうちで自分自身の存在を感知しているということが、その存在に根源的に属している。人間は単に無限に開かれた地平のうちへ投げ出されて存在するだけでなく、それと同時に無限な地平のうちで自分自身を見出しながら存在する。我々人間はもともと自分自身の外へ抜け出し、無限に開かれた地平へ超え出て、無限と無とに曝されている。人間は存在するものの真直中に投げ入れられて、存在するものすべてに依存して存立し、存在するものすべてとのオンティッシュな(有的な)関係から抜け出すことはできない。しかし、人間は同時にまた、自分が存在するもの全体に依存してはじめて存在することが可能であることを知っていることにおいて、存在するもの全体をいわばオントローギッシュ(有論的)に超え出ている。もし我々の存立のための条件が一つでも欠ければ、自分が生存することが可能でないことを我々は知っていることにおいて、我々の存在は根底から無に曝し出されている。我々人間は人間である限り、最初から常に、無のうちへ出て、自分の存在の空しさを感じている。「感じるものがなければ惨めではない。こわれた家は惨めではない。惨めなのは人間だけである」(『パンセ』 fr. 399)。

然るに、普通我々はかかる自分の自然的状態を自ら晦まし、自己逃避せんとする。賭け事に夢中になったり、気を紛らしたり、あるいは、仕事に打ち込むことすら、自己から逃れんがためである。「人間は、死と不幸と無知とを癒すことができなかったので、幸福になるために、それらのことをあえて考えないようにした」(『パンセ』 fr. 168)。

しかし、虚無性が人間存在の根底に属しているが故に、気を紛らすことによって、自分の虚無性から逃れきることはできない。むしろかえって、気を紛らすことこそ、「われわれの惨さの最大のもののなのである」(『パンセ』 fr. 171)。我々は所詮死を逃れることができないにもかかわらず、気を紛らすことによって、知らず知らずのうちに死に至ってしまうからである。

幾何学の基礎についてのパスカルの思索は、上のようにとすればそこから逃れんとしがちな無

限の開けのうちへ、我々を不可避免的に立たせる。無限大(いわゆる無限)と無限小(無)というこの数学的無限の驚異に打たれた心臓を抱いて、パスカルは生の根底に口を開いた「無限と無とのこの二つの深淵」のうちへ決断的に飛び込んでいったのである。

九鬼周造博士が『驚きの情と偶然性』<sup>(6)</sup>の最後で、「偉大な思想は心臓から来るといふ言葉があるが、現実の世界の偶然性に対して驚くこと、驚いて心臓に動悸を打たせることが、終始一貫して、哲学思索の原動力でなければならないと考えるのである」と結んでいるが、パスカルの「パンセ」こそまさにかかる思索ではなかったろうか。

パスカルにとって、パンセとはまさになによりも「自分のことを考える」思索である。この「あそこではなくてここ、あの時でなくて現在の時に、なぜいなくてはならないのかという理由(raison)が全くない」深淵な存在となった自己については、まさに「理性(la raison)の知らない理性をもつ」心情による思索によって考えられるのではなからうか(『パンセ』 fr. 205 と fr. 277 参照)。

自然のうちへ置かれた我々の状態を差しあたり我々の心情は惨めな状態として感知する。「われわれは、広漠たる中間に漕ぎいでているのであって、常に定めなく漂い、一方の端から他方の端へと押されてゆく。我々がいかなる極限へ自分をつなぎ固定しようとも、それはゆれて我々と離れてしまう、もしそれを我々が追いかければ、我々の把握からのがれ、われわれから滑り、永遠の逃走でもって逃れ去る」(『パンセ』 fr. 72)。無限の開けのうちで我々は生きるべき方向を見失ない、浮動している。「空間によって宇宙は私を包み(comprendre)、一つの点のように呑み込む」。

しかし、「考えることによって、私が宇宙を包み込む(=理解する comprendre)」(『パンセ』 fr. 348)という。空間的無限の広がりの中なかでは、そのうちを空しく浮動するだけで、そこから脱け出すことはできない。しかし「考える」こと——「パンセ」ではそれはとりも直さず「自分のことを考える」ことであるが——によって我々は自分自身を越え出る。「我々の尊厳のすべては、考えることの中にある。我々はそこから立ち上がらなければならぬのであって、我々が満たすことのできな

い空間や時間からではない。だからよく考えることに努めよう。ここに道徳の原理がある」(『パンセ』fr. 347)。パスカルの「考える (penser)」とは単に「意識する」というようなことではない。我々人間は「考える」という働きに立脚し、「考える」という働きと共に自分自身を超えて上昇していくのである。パスカルの「考える」という働きはそういう生の搏動をもった心臓の働きである。「考える」ということは、単に考えるという働きにとどまらない。「よく考える」(bien penser)ことを求めて自ら高めてゆくのである。我々は宇宙の無限の拡がりに包みこまれてそこから出ることはいくできないが、「考える」という働きによって無限な宇宙を垂直に超越して「部分を持たない無限」である神(『パンセ』fr. 231)にまで至るのである。

自分の自然的状態を惨めと感じる同じ「心臓」が同時にまた自らを超越する働きをする。根底を失い深淵となった自己の惨めな状態のうちに敢えて飛び込んでこそ、その無底の深淵から浮び上ることも可能なのである。「我々に触れ我々の喉ぐびを押えている我々の惨さをすべて見ているにもかかわらず、我々は自分を高めようとする自分で抑えることのできない一つの本能をもっている」(『パンセ』fr. 410 傍点は筆者が付記す)。生の根源に属する意志(本能)は、我々の惨さを見るが「故に」銷沈するどころか、かえって惨さを見る「にもかかわらず」、高揚しみずから高めんと欲する。ここにパスカルにおける「心臓の転換」(=回心 conversion de le cœur)がある。それは自分の惨さから眼を逸せる「気を紛せること」(divertissement)と異なり、惨さの直視を通しての心臓の全面転換(con-version)なのである。かかる転換こそ、単なる理性の論理と異なった心臓の論理に従って生起するのである。先に私が傍点を付した「にもかかわらず」は、まさにこの転換点を示している。ニーチェがその自叙伝的作品『この人を見よ』のなかで「すべての決定的なものは『それにもかかわらず』成立する」(S. 372)という場合の「にもかかわらず」に相当する。

無限と虚無との二つの深淵の間に宙吊りに不安を感じる「心情=心臓」が、そこから逃れようとすることなく決意(これこそまさに心臓の心臓らしい働きである!)をもって飛びこむことによ

て、その洞ろなる深淵の底から、みずから高まらんとする意志(これこそまさに心臓の心臓たる働きである!)として立ち昇ってくる。自然によって置かれた位置(無限と無とに曝された状態)に、受動的にはなく能動的に決意して自ら立つ時、そこで悲惨を感じていた心臓は根本から転換するのである。

ニーチェも生の最深の次元を「心臓」(das Herz)と名づけ、「生の心臓」のうちに或一つの意志(ニーチェの場合「力への意志」)の働きをみとめたが<sup>(6)</sup>、パスカルも同様に、生の心臓を意志の働きにあるとみとめた。「計算器は、動物のなすどんなことよりも、一層思考に近い働きをする。しかしそれは、動物のように、意志(volonté)をもつといわれるようなことは何もしない」(『パンセ』fr. 340)。

周知のように、なるほどパスカルは「考える」ということをもって人間の存在を性格づけたが<sup>(7)</sup>、一層根源的には、そもそも「生」を特徴づけるのは「意志する」ということである。

「気を紛らす」という我々の有り方は、自己欺瞞的にして自己逃避的な我々の非本来的な有り方であるが、そういう有り方も「幸福への意志」から生まれたのである。人間の存在は根底から虚無、死に曝されている。気を紛らすことがないとたちまちにして、「魂の奥底から、倦怠、暗黒、悲哀、傷心、憤懣が湧き上がってくる」。そこで、人間は幸福になるために、根底から虚無に曝された自分のことを「考えない」ことにした。気を紛らすことによって人間は、自分の根底の「空虚さ」から逃れ、人間の本性である「考える」ことから逃れる。二重の自己逃避を企る。所詮自分自身から逃れることはできないにもかかわらず、自己逃避的な生き方では生きていながら生きていない。「このようにして我々は決して生きていない、しかし我々は生きることを希う。そして、我々は幸福であることに向って用意しながら、決して幸福でないことが避けられない」(『パンセ』fr. 172)

我々は生きながら敢えて生を求めなければならない。そうでなかったら、たちまち自分から逃れるであろう。生は、絶えず自分自身を求めて自分自身を乗り越えてゆくという動性にある。「私は、人間をほめると決心する者も、人間を非難すると決

心する者も、気を紛らすと決心する者も、等しく非難する。私は呻吟しながら求める者しか是認できない」(『パンセ』fr. 421)。この場合の「求める者」は、「純粋な、意志なく、苦痛なく、時間なき」<sup>(8)</sup>認識主観ではない。かかる純粋な認識主観は自分自身は傍観者の位置に置き、自分抜きに、自分とは別の何かを、たとえば「知のために知を」求めるのである。そうではなく、「呻吟しながら求める者」は、生きるということの根底から衝き上げてくる苦悩に迫られて求めるのである。生きながら、即ち自分の全存在を賭して、求めるのである。このような仕方での自己の探索こそが、パスカルの思索(パンセ)に他ならないといえるのではないか。

それでは一体このように挙げて自分の全存在を賭して能く自分自身を追求しうる者は如何なる者であろうか。

それは、虚無のうちに投げ出されて、虚無のうちに存在する自分自身をしっかりと直視するに耐え、かかる自分自身の上にしっかりと立つことのできる者である。現在此処に斯く私が存在する理由(根拠)は無い。私の存在を根底から支えるのは無である(すなわち支えるものが無い)。「あそこではなくてここ、あの時でなくて現在の時に、なぜいなくてはならないのかという理由が全くない」(前掲引用文)ということは、逆に言うと、ここ現在でなくても、あそこあの時にでも有りえたのである。すなわち、この私の存在は、無限に可能な存在のうちの偶然な存在である。偶然な存在としての私は、さらに、死(虚無)によって、一刻一刻脅かされている。いつ死ぬか判らない、この瞬間に死ぬかも知れない。生は徹底的に虚無によって曝されている。虚無な無限のうちに根無し草の如く常に漂い生きている。斯くの如き生に立脚する者が能く、自分の存在を不確実な自分の可能性に賭けることができるのである。根拠から根を引き抜かれた者のみ根刮ぎ自分の存在を賭けることができる。

人間が元々置かれた無限な空無のうちに自ら意志して立ちうる者にとって、無限な空無のうちに無限な可能性をみる事ができる。人間存在の空しさは、無限な可能性に向って空け開かれていることの証左にもなりうる。「無限のために生みださ

れた」<sup>(9)</sup>人間は、自分自身を無限に超えていかなければならない。それが人間の生くべき方向であり、思索(パンセ)が向うべき方向ではないであろうか。

ニーチェは『曙光』の或る箇所ではパスカルについて次のように言っている<sup>(10)</sup>。「情熱、精神、誠実を合一した、すべてのキリスト者のうちの第一人者」であると。自分自身に対して自分をどこまでも欺くまいとするパスカルの「誠実性」は、無限の空無のうちに自分自身の存在を開示したにとどまらない。パスカルに於いてはさらに誠実性は情熱と合一し、自分自身を賭して自分の真実性を徹底して追求していく過程のなかで、無限に自分自身を高める意志へと転換するのである。自己欺瞞のみならず自己の根底の虚無すら突き破るパスカルの徹底した誠実さは、やはり誠実さをパスカルと同程度に——いや或る意味でパスカル以上に——徹底したニーチェにして、はじめて理解しうる場所であろう。

上の如くパスカルとニーチェは相似た誠実さ、相触れ合う心情をもっていたが、それでは一体如何なる道程を経て両者は袂を別ち、一方(パスカル)は「神と共なる人間の至福」<sup>(11)</sup>へと赴き、他方(ニーチェ)は「神なき世界の無秩序、偶然の世界」<sup>(12)</sup>を歓喜する境地に至ったのであろうか。この解明のためには、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。哲学者および学者の神ならず」<sup>(13)</sup>といわれるが如き神とパスカルは一体いかなる地平で出会ったのか、この次元の解明をまず行わなければならない。これについては章を改めて論じたい。

#### 註

- (1) “Ecce Homo” Warum ich so klug bin 3 Kröner 版全集 S. 322。以下ニーチェからの引用はすべて Kröner 版の全集による。
- (2) ブランシュヴィック版断章144。以下「パンセ」からの引用はすべてブランシュヴィック版断章番号によって記す。
- (3) 以下，“De l'esprit géométrique”からの引用はすべてプレヤード版の頁数による。
- (4) “Méditations”の第一省察冒頭でのべているように、デカルトが求めたのは、「諸科学に於ける確実で不易な何かを確立すること」であった。プレ

ヤード版 “Descartes” p. 267 を参照されたい。

- (5) 九鬼周造【人間と実存】(岩波書店) 所収。191 頁参照。
- (6) Nietzsche, Also sprach Zarathustra “Von der Selbstüberwindung” で次のようにツァラトゥストラは言っている。  
「わたしが生そのものの心臓に、また生の心臓の根底にまでもぐりこんだかどうか、真剣に吟味せよ！ わたしが生あるものを見いだしたところ、そこに力への意志を見いだした」。  
Kröner 版 S. 124 参照。
- (7) かかる人間解釈は【パンセ】のうちで散見される。たとえば fr. 339, fr. 347 などを参照されたい。
- (8) Nietzsche “Zur Genealogie der Moral”  
Kröner 版 S. 361。
- (9) Pascal “Préface pour le traité du vide”  
Pléiade 版 p. 533。
- (10) Nietzsche “Morgenröte” Nr. 192 Kröner 版

S. 159。

- (11) バスカルは【パンセ】 fr. 60 で「第一部、神なき人間の悲惨。第二部、神と共なる人間の至福」という論述のスケッチを遺している。
- (12) ニーチェは、「強さのベンシズムによせて」と題する断章において次のように言う。「以前に人間が神を必要としていたのであるなら、今や、神なき世界の無秩序が、偶然の世界が、人間を歓喜せしめる。そういう世界は、怖るべきもの、二義的なもの、誘惑的なものを本質にもっているのである」。(“Der Wille zur Macht” Nr. 1019) 「強さのベンシズム」についての一文は、ニーチェ本人の【力へ意志】の論述プランからいっても、最終的な章に配列されて然るべきである。
- (13) バスカルの死後発見された【メモリアル】と呼ばれる断章に記されている。この断章を生前バスカルは胴着にぬいつけていて肌身離さなかったといわれている。Pléiade 版 p. 554 を参照せよ。